『旧地理A』，『旧地理B』

問題作成部会の見解

『旧地理A』

1 出題教科・科目の問題作成の方針（再掲）

- 地理に関わる事象を多面的・多角的に考察する過程を重視する。地理的な見方や考え方を働かせて、地理に関わる事象の意味や意義，特色や相互の関連を多面的・多角的に考察したり，地理的な諸課題の解決に向けて構想したりする力を求める。問題の作成に当たっては，思考の過程に重きを置きながら，地域を様々なスケールから捉える問題や，地理的な諸事象に対して知識を基に推論したり，資料を基に検証したりする問題，系統地理と地誌の両分野を関連付けた問題などを含めて検討する。

2 各問題の出題意図，解答結果及び自己評価等

第1問 学習指導要領「地理A」の「(1) 現代世界の特色と諸課題の地理的考察」における「ア 地球儀や地図からとらえる現代世界」，「(2) 生活圏の諸課題の地理的考察」における「ア 日常生活と結び付いた地図」，「イ 自然環境と防災」に関する大問である。問1は，時差の理解と所要時間の計算ができるかを問うた。問2は，地形図から実際の経路を想像できるかを問うた。問3は，日本の特定の月別日照時間の主題図から日本における基本的な気候の理解について問うた。問4は，陰影起伏図から地形の成因と自然環境の理解について問うた。問5は，過去の土地利用から液状化の発生危険度を推定できるかを問うた。問6は，流域の位置の違いによる水位変化の理解を問うた。全体を通じて，地理の基本的な知識を用いた技能や見方・考え方を問う大問であり，特に防災は共通テストの主要なテーマであるという出題意図を伝えることができたと考えている。得点率分布は，問3の正答率が高く，問4がやや低かったが，大問全体の平均得点率は、『旧地理A』全体の平均よりやや低いものの大きく外れてはいなかった。さらに適切な資料を踏まえた思考力，判断力を問う作題を今後も検討していきたい。

第2問 学習指導要領「地理A」の「(1) 現代世界の特色と諸課題の地理的考察」における「イ 世界の生活・文化の多様性」に関する大問である。具体的には，「風土に根差した生活・文化」をテーマに，写真や統計図表などから，自然条件や経済・社会的条件を考慮し，多面的・多角的に地域的特色やその差を見出す力を問うている。あわせて，時間的な変化とその要因を考察する力を測ることを目的としている。大問の内容としては，渇水期と浸水期における漁村集落の特徴や生活様式について，オートバイ保有台数と乗用車保有台数の関係の変化とその要因について，国の位置や宗教と公立小学校の長期休暇の違いについて，嗜好品の消費量の地域差，特徴的な保存食，乾燥地域における農牧業に必要な地下水利用方法についての六つの小問で構成している。「(1) 現代世界の特色と諸課題の地理的考察」における「ア 地球儀や地図からとらえる現代世界」で学習した成果を活用して，上記のテーマを考察できるように，単純な知識を問うのではなく，様々な形式でのデータの読み取りと分析から地域的特色を考察させる作業を小問中に含めた。正答率は問1で高く，問3で低かったが，第1問全体の平均得点率としては『旧地理A』全体の得点率とほぼ同じであり，全体として出題形態や難易度のバランスはとれていたと考える。

第3問 学習指導要領「地理A」の「(1) 現代世界の特色と諸課題の地理的考察」における「イ 世界の生活・文化の多様性」に関する大問である。「南アジアの自然環境と経済発展の光と影」をテーマに、主題図や統計図表などの資料から、多角的に地域的特色を見出す問題構成としてしている。問1では、気温と降水量から南アジアの気候特性を問うた。問2は、宗教人口から南アジアの社会的特性の多様性を問うた。問3は、衛星画像と景観写真からインドにおける都市内の機能を問うた。問4は、インド国内の人口移動と総生産から大都市移動とその要因を問うた。問5は、産業構造と二酸化炭素排出量から経済発展の国家間比較を問うた。問6は、インドにおけるトイレ利用を事例に、生活・文化の変化や多様性を問うた。学習内容に基づいた基礎的知識を問いつつ、受験者には初見となるであろう図表を用いた問いを出題するなど、バランスを考慮した。大問全体の平均得点率は概ね標準的であった。小問の正答率は問1、問2、問3が低く、問6が高かった。

第4問 学習指導要領「地理A」の「(1) 現代世界の特色と諸課題の地理的考察」における「ウ 地球的課題の地理的考察」に関する大問である。絶滅危惧種をトピックとして取り上げ、地球環境問題を考える探究を通して、世界における様々な地球的課題の実態と解決策を考える問題によって構成した。問1は、哺乳類の絶滅危惧種の世界的な分布とその特徴、問2は、東南アジアにおける森林面積の縮小、問3は、クロマグロ資源量の推移とその背景、問4は、地球温暖化の要因となる化石燃料による発電量の国別の比較、問5は、湿地の特徴と保全についてのローカルなスケールでの取組み、問6は、環境問題に対する国際的な取組みを素材としている。受験者の関心を引くため、生物の絶滅危惧種からはじまり、様々な地球的課題を紐解いていく形式とした。統計や主題図をはじめとしたデータの読み取りと分析から、地理的事象や課題、その解決策について考察させる内容としている。大問全体の正解率は高かった。問題文をよく読み、資料を正確に把握すれば正解を導ける問題が含まれていたことによるものと考えられる。ただし、問1と問2に関しては、資料から国を識別することがやや難しかったようであり、正答率は低かった。

第5問 学習指導要領「地理A」の「(2) 生活圏の諸課題の地理的考察」における「ウ 生活圏の地理的な諸課題と地域調査」に関する大問である。北海道における開拓や農村の地として発展し、その後、豊富な雪量からスキーの地として有名になり、近年では訪日外国人の来訪によって変化が生じている北海道のニセコ地区を対象地域とし、地理的技能や思考力を多面的に測る問題を出題した。問1は、各都市の雨温図を読み取り、北海道内の気候状況を考察する問題、問2は、土地利用と収穫作物の関連を地図から読み解く問題、問3は、地形と景観、歴史について地図と写真を基に考察する問題とした。問4は、主題図から地理的情報を読み取り、観光開発による地域の景観や経済環境への影響を考察する問題、問5は、外国人と日本人の観光者数とその季節的な変化を、グラフの読み取りから判断する問題、問6は、地域のために適切な施策と評価指標を定めることを思考する力を問う問題とした。問5の正答率が低く、問2、問4、問6の正答率が高かったが、大問全体では標準的な正答率であった。識別性に関しても大きな問題はなかった。全体的に、生徒の探究過程について順を追って示し、現地調査を行うことの重要性を伝える大問になったと考える。

3 ま と め

- (1) 「地理A」の学習指導要領の目標と内容に沿っており、学習指導要領を踏まえた各分野・領域から出題されているとされた。また、資料から読み取って得た情報を基に考察する力、知識・技能、探究を深めたり課題を解決したりしようとする力がバランスよく問われているとの評価

を得た。場面設定型の大問では、生徒が多面的・多角的に探究する過程が示されており、地域調査では、実践的な調査を踏まえつつ、生徒の探究過程が順を追って示され、現地調査を行う重要性を感じることができる設定となっていると評された。今後も、臨場感をもたせた問題を織り交ぜながら、地理的な見方・考え方を働かせて解答に到達できるような問題作成を検討していきたい。

- (2) 難易度については平均点が 56.96 点であり、昨年度から 1.21 点高い点数となった。全体として難易度は適切であり、資料から読み取った情報を基に、知識や技能、地理的な見方・考え方を働かせて考察できる問題が多いが、「地理A」の学習成果を評価する試験としては発展的な内容が問われている問題も複数あり、難易度の高い問題も散見されたとの評価を受けた。難易度に関しては、「歴史総合」や「公共」など他科目とのバランスに配慮しつつ、引き続き適切な難易度の問題作成を検討していきたい。
- (3) 全体として、受験者に配慮した適切な表現や用語が用いられているとの評価を得た。一方で、資料・写真の判読が難しいものもあり、その示し方にはより一層の工夫が必要であるとの要望も寄せられた。図表や写真などの資料の視認性については、何度も検討を重ねて確認してきたものではあるが、作問時の留意事項として継続して検討や確認を重ねていきたい。
- (4) 出題のバランスについては、範囲、題材、場面設定ともに、バランスよく多様な観点から出題されており、各大問の設問数及び総問題数も適切であるとの評価を得た。特に題材については、教科書では取り上げられていない題材も多くみられたが、地理の授業で扱われる内容や身に付けた知識・技能を基に、地理的な見方・考え方を働かせて考察する問題が多く、工夫された出題となっているとの評価であった。今後も、新規の資料を適度に取り入れながら、新規性の高い意欲的な作問に取り組んでいきたい。
- (5) 全体として、学習指導要領の趣旨に沿った問題作成であり、出題バランスなどは概ね評価された試験であったといえる。一方、難易度に関しては、発展的で難易度が高い問いがあったとの指摘を受けた。今後の『地理総合，地理探究』においても、受験者に対する分量や難易度の負担には十分に留意しつつ、新規の資料や臨場感のある問題などを交えながら、高等学校等で得た知識・技能を踏まえた地理的な思考力、判断力を問う作問を追求していきたい。

『旧地理B』

1 出題教科・科目の問題作成の方針（再掲）

- 地理に関わる事象を多面的・多角的に考察する過程を重視する。地理的な見方や考え方を働かせて、地理に関わる事象の意味や意義，特色や相互の関連を多面的・多角的に考察したり，地理的な諸課題の解決に向けて構想したりする力を求める。問題の作成に当たっては，思考の過程に重きを置きながら，地域を様々なスケールから捉える問題や，地理的な諸事象に対して知識を基に推論したり，資料を基に検証したりする問題，系統地理と地誌の両分野を関連付けた問題などを含めて検討する。

2 各問題の出題意図，解答結果及び自己評価等

第1問 学習指導要領「地理B」の「(2) 現代世界の系統地理的考察」における「ア 自然環境」に関する大問である。世界の地形や気候といった自然環境と自然災害に関する諸事象を取り上げ，その特徴，分布，時空間的变化について考察させることを目的とした。本大問は，プロセス型であり，島の自然環境から，世界の自然環境に関して，図表を用いて思考力と判断力を問う構成にしている。問1は，島周辺の海底の標高分布から，その地域の大地形を問うた。問2は，マダガスカル島の降水分布から，大気大循環や海流などの基本的な知識や理解を問うた。問3は，アイスランドという火山島の海岸地形，氷河地形について，写真や陰影図から基礎的な知識を問う問題であった。問4は，カナリア諸島の島々の植生と気候について，正誤判断をする問題であった。問5は，環礁の地形の特徴とそれに関連した自然環境，自然災害を問うた。図の読み取りと知識が必要な問題であった。問6は，世界の島の自然災害の特徴について問うた。地形，気候，植生，自然災害と自然環境に関してほぼまんべんなく出題し，多面的・多角的に自然環境，自然災害について問うことができたが，問6を除いて正答率は低かった。大問全体を通して識別性は高かった。

第2問 学習指導要領「地理B」の「(2) 現代世界の系統地理的考察」における「イ 資源，産業」に関する大問である。大問の作成にあたっては，世界の資源・エネルギーや農業，工業，流通，消費などに関する諸事象を取り上げ，それらの分布や動向などについて考察させるとともに，現代世界の資源・エネルギー，食料問題を大観することを意図した構成とした。問1と問2は，資源と関わる林業，農業について消費（用途）を含めて考察する問いとした。問3は，エネルギーの自給率と供給状況，経年変化の組合せから各国の特徴を思考する問いである。問4は，GDPの内訳を指標とした各国比較を通して，農業，工業，流通の状況から各国の特徴を考察する問いである。問5は，繊維産業に注目し，「綿織物の輸出額」と各国の具体的情報をもとに世界の資源と産業の構造を考察する問いである。問6は，日本に目を向け，資源と産業のグローバル化に関わって経済構造が経年的に変化することを検討する問いとした。得点率及び正答率を参照すると，問1，問2，問5は標準，問6は易，問3，問4はやや難と判断された。大問全体の得点率は他の大問と比較して高かった。

第3問 学習指導要領「地理B」の「(2) 現代世界の系統地理的考察」における「ウ 人口，都市・村落」に関する大問である。人口，都市，村落の諸側面を幅広く問う問題形式とした。都市については，発展途上国と先進国では状況が大きく異なることを踏まえ，両地域の都市化の違いを考えさせることに重きを置いた。また，村落については，日本を事例に，地形図にあらわれる集落形態の立地の背景を考えさせることを意図した。問1では，人口転換論に基づき発

展途上国の人口急増の背景を考察する問いとした。問2は、先進国の人口問題を、都心、郊外、大都市圏外に分けてその違いを考察する問いとした。問3は、世界都市や首位都市について巨大企業の集積から考察する問いとした。問4は、高層建築物の景観から、地域による都市構造の違いを考察する問いとした。問5は、大都市圏の通勤流動の変化から、郊外地域の実態を考察する問いとした。問6は、村落に目を向け、地形図からその特徴を読み取る問いとした。正答率をみると、問2、問5、問6が高く、特に問5が高かった。単純な図の読み取りのみで解答を導くことができる問いにはならないようにするなど、出題内容や難易度のバランスに十分配慮した問題作成に努めたい。

第4問 学習指導要領「地理B」の「(3) 現代世界の地誌的考察」における「イ 現代世界の諸地域」に関する大問である。寒冷地域と高山地域における自然環境、産業、都市・人口分布などを取り上げ、それらの地理的变化や相互関係について考察する力を問うた。問1は、冬日・真冬日発生日数の特徴、問2は、気候・地形と土地被覆の関係、問3は、アンデス山脈周辺国における標高別の都市人口、問4は、ネパールにおける農産物生産の地理的变化、問5は、カナダのいくつかの産業における州別輸出額割合、問6は、北欧諸国における公共交通機関の国内乗客数と人口分布の関係を問うた。「(2) 現代世界の系統地理的考察」で学習した成果を活用しながら、亜寒帯・寒帯・高山気候に属する国・地域の地理的特徴を包括的に思考することをねらいとした。大問の平均得点率は全体の平均を下回り、やや難な問題となった。寒冷地域と高山地域という、比較的馴染みがない地域を出題したことが、受験者を困惑させたかもしれない。問1は、冬日・真冬日の発生日数で気候の違いを問うユニークな形式の出題であり、識別性の高い良問となった。問3は、標高と都市の立地を問う出題だったが、識別性は低調であった。受験者にあまり馴染みのない知識を問うたことが一因として考えられ、受験者が思考しやすい内容で作問する工夫が必要であった。

第5問 学習指導要領「地理B」における「(1) 様々な地図と地理的技能」の、「イ 地図の活用と地域調査」に関する大問である。北海道における開拓や農村の地として発展し、その後、豊富な雪量からスキーの地として有名になり、近年では訪日外国人の来訪によって変化が生じている北海道のニセコ地区を対象地域とし、地理的技能、思考力を多面的に測る問題を出題した。問1は、各都市の雨温図を読み取り、北海道内の気候状況を考察する問題、問2は、土地利用と収穫作物の関連を地図から読み解く問題、問3は、地形と景観、歴史について地図と写真を基に考察する問題とした。問4は、主題図から地理的情報を読み取り、観光開発による地域の景観や経済環境への影響を考察する問題、問5は、外国人と日本人の観光者数とその季節的な変化を、グラフの読み取りから判断する問題、問6は、地域のために適切な施策と評価指標を定めることを思考する力を問う問題とした。問5の正答率が低く、問2、問4、問6の正答率が高かったが、大問全体では標準的な正答率であった。識別性に関しても大きな問題はなかった。全体的に、生徒の探究過程について順を追って示し、現地調査を行うことの重要性を伝える大問になったと考える。

3 ま と め

- (1) 「地理B」の学習指導要領の目標と内容に沿っており、学習指導要領を踏まえた各分野・領域から出題されているとされた。また、資料から読み取って得た情報を基に考察する力、知識・技能、探究を深めたり課題を解決したりしようとする力がバランスよく問われているとの評価を得た。場面設定型の大問や地域調査については、多様な資料を基に多面的に探究する過程や現地調査を行う重要性を感じることができる場面設定となっているとされた。今後も、臨場感

をもたせた問題を織り交ぜながら、地理的な見方・考え方を働かせて解答に到達できるような問題作成を検討していきたい。

- (2) 難易度については平均点が 61.43 点であり、昨年度から 4.31 点低く、『旧日本史B』『旧世界史B』よりも低い点数となった。また、『地理総合、地理探究』と比較すると平均点は、3.95 点高かった。資料から読み取った情報を基に、知識や技能、地理的な見方・考え方を働かせて考察できる問題が多く、また極端に正答率の低い設問もなく、難易度も適切であるとの評価を受けた。難易度に関しては、『歴史総合、世界史探究』や『歴史総合、日本史探究』など他科目とのバランスに配慮しつつ、引き続き適切な難易度の問題作成を検討していきたい。
- (3) 全体として、受験者に配慮した適切な表現や用語が活用されているとの評価を得た。一方で、写真の判読が難しいものがあり、明瞭な資料の提示とそこから読み取ることができる情報に対応した設問に期待したいとの要望も寄せられた。図表や写真などの資料の視認性については、何度も検討を重ねて確認をしてきたものではあるが、作問時の留意事項として継続して検討や確認を重ねていく必要がある。
- (4) 出題のバランスについては、範囲、題材、場面設定ともに、バランスよく多様な観点から出題されており、各大問の設問数及び総問題数も適切であるとの評価を得た。特に題材については、教科書では取り上げられていないものが大半であったものの、「地理B」の学習を通して身に付けた知識・技能や見方・考え方を働かせて考察したり推察したりする問題が多く、工夫された出題となっているとの評価であった。今後も、新規の資料を適度に取り入れながら、新規性の高い意欲的な作問に取り組んでいきたい。
- (5) 全体として、学習指導要領の趣旨に沿った問題作成であり、難易度や出題バランスなどは概ね評価された試験であったといえる。今後の『地理総合、地理探究』においても、受験者に対する分量や難易度の負担には十分に留意しつつ、新規の資料や臨場感のある問題などを交えながら、高等学校等で得た知識・技能を踏まえた地理的な思考力。判断力を問う作問を追求していきたい。